法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

研究展望(平成23年)

IKAI, Takamitsu / 宮本, 圭造 / 高橋, 悠介 / 江口, 文恵 / 表, きよし / 石井, 倫子 / 山中, 玲子 / 中司, 由起子 / 伊海, 孝充 / 竹内, 晶子 / MIYAMOTO, Keizō / TAKAHASHI, Yūsuke / EGUCHI, Fumie / OMOTE, Kiyoshi / ISHII, Tomoko / YAMANAKA, Reiko / NAKATSUKA, Yukiko / TAKEUCHI, Akiko

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)
39

(開始ページ / Start Page)
59

(終了ページ / End Page)
91

(発行年 / Year)
2015-03-31

Hosei University Repository

研究展望（平成二十三年）

平成二十三年に発表された能・狂言関係の単行本、および雑誌等に掲載された論文を取り上げる。例年と同じく、単行本（宮本圭造）、資料研究（高橋悠介）、能楽論研究（江口文恵）、能楽史研究（表きよし）、作品研究（石井倫子・中司由起子・山中玲子）、狂言研究（伊海孝充）、外国語による能楽研究（竹内晶子）に分類し、分担執筆を行っているため、研究全体の動向を展望するというよりは、各論考の紹介を主体とする内容になるであろうことを、最初にお断りしておく。また、重要な論稿を見落とすなどの遺漏も少なからずあろうと思う。ご寛恕を乞う。

【単行本】

『能楽を愛好した人々の思い出集―「近代名古屋の能楽を支えた人々」に向けられた手紙より―』（東海能楽研究会編。A5版122頁。1月。東海能楽研究会。非売品）

近代名古屋の能番組の集成である『近代名古屋の能楽を支えた人々』を刊行した際、東海能楽研究会の筧鉱一が多くの人から募った近代名古屋の能楽についての証言を集め、一冊にしたもの。編集方針が明確でなく、様々な証言が雑然とならんでいるため、通読するにはなかなか根気がいるが、能楽師の履歴などについての証言は有用であろう。おおむね昭和初年から戦後にかけての証言が収められている。末尾に渡辺義雄『私の音楽生活』から名古屋の能楽に関する記事を転載する。

『新版　能・狂言事典』（西野春雄、・羽田昶編。A5版609頁。1月。平凡社。六五〇〇円）

昭和六十二年に初版が刊行された『能・狂言事典』の新版。平成九年の新訂増補版の改訂を受け、それ以後の研究・上演・能楽界の変動を踏まえて記述の見直しを行うとともに、「現代人名」の項を最新の情報に更新するなど、新たな改訂を行う。

『切合能の研究』（伊海孝充著。A5判442頁。2月。檜書店。一一〇〇〇円）

従来まとまった研究の少なかった合戦物の能に正面から取

Hosei University Repository

り組んだ研究書。従来、この種の能は「斬リ組ミ能」と総称されるのが常であったが、合戦物の能の全てに「斬リ組ミ」の働事があるわけではないことから、「切合能」と呼ぶべきであると提唱する。第一部「切合能の展開」では、応永年間から戦国期へと「切合能」の作能がどのように変遷したのか、また、江戸初期から中期にかけて、その演技がいかに成熟していったのかを丹念に明らかにする。第二部「能における長刀の意義とその変遷」では、長刀を用いる能の諸作品に焦点を当てて、その芸能的特質を論じる。第三部「能と諸芸能との関わり」では、〈花月〉における芸尽くし、金春禅鳳の芸論を糸口として、能と同時代の諸芸能との関わりを見る。なお、石井倫子(『国語と国文学』1066。9月)、小田幸子(『楽劇学』19。12年3月)、米田真理(『能と狂言』10。12年4月)、岩城賢太郎(『日本文学誌要』86。12年7月)の書評がある。

『謡曲画誌　影印・翻刻・訳註』(小林保治・石黒吉次郎編。A4判452頁。2月。勉誠出版。一五〇〇〇円)

江戸中期に刊行された中村三近子編『謡曲画誌』全文の影印・翻刻のほか、地名・人名・出典を中心とした註釈、現代語訳、解説を載せる。小林保治による解説は、『謡曲画誌』の刊年に関する問題、収録曲の解説の手法、中村三近子及び挿絵を描いた橘守国の伝記に言及する。

『観阿弥・世阿弥：能の大成者』(マンガ・ゆづか正成、シナリオ・北島ヒロ。山口正・河合敦・石井倫子監修。A4判34頁。2月。朝日新聞出版。四九〇円)

週刊新マンガ日本史の一冊。観阿弥・世阿弥の生涯に取材したマンガを収める。能楽の歴史、鑑賞に関する入門的記事もあり。

『鏡花と能楽』(西村聡編。A4判92頁。3月。金沢大学人間社会研究域。非売品)

金沢大学が泉鏡花記念館、金沢能楽美術館と共同で開催した企画「仕舞と対談「鏡花と能楽～名作『歌行燈』を中心に～」」の報告書。展示の概要、対談の記録とともに、能楽を素材とした鏡花の作品のうち、『歌行燈』『照葉狂言』『新通夜物語』を取り上げ、その背景となる当時の歴史的状況を考察した、以下の三本の論考を収める。吉田昌志「泉鏡花「照葉狂言」縁起」、西村聡「『歌行燈』を能楽で読む」、穴倉玉日「「新通夜物語」覚書」。論の詳細については、【能楽史研究】の項参照。

『古楽器の形態変化及びジャンル間の交流に関する総合研究』(研究代表者：高桑いづみ。A4判132頁。3月。非売品)

高桑いづみを研究代表者とする平成二十～二十二年度の科学研究費補助金の共同研究の成果報告書。各地に所蔵される龍笛、能管、三味線、箏、胡弓の詳細な採寸データに基づき、楽器の形態がどのように変遷したかを考察する。能管だけで

Hosei University Repository

も四一点のデータが挙がっており、楽器研究の基礎資料として注目すべき内容。目視による形状の分析のみならず、X線透過撮影によって内部構造の分析も行い、能管が龍笛から派生したとする従来の通説を見直すなど、多くの成果を上げている。

『権藤芳一　上方芸能を語る―能楽・文楽・歌舞伎、そして武智鉄二―』（上方芸能研究会編。A4判252頁。3月。立命館大学アート・リサーチセンター上方芸能研究会。非売品）

立命館大学アート・リサーチセンターの上方芸能研究会が平成十九年から一年間にわたって行った権藤芳一の聞き書きをまとめたもの。同大学のCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ」拠点に拠る研究成果。能楽のみならず、文楽・歌舞伎・武智鉄二の演劇活動まで、多彩なジャンルをカバーしているが、能楽についての談話が最も多く、全体の分量の約半分を占めている。戦時中の関西の能楽界の様子から、戦後の復興の状況、能楽の新たな興行形態、京都・大阪・神戸で活躍しているシテ方、囃子方、狂言方のこと、能評家のことなど、幅広い視点から戦後の関西能楽の歩みを語っている。長く京都観世会館に勤めてこられた経験と、芸能史研究者としての学識に裏付けられた内容豊かな談話は、「時代の証言」としてすこぶる貴重で、それがこのような形でまとめられたことを喜びたい。

『能　大和の世界』（松岡心平著。B6版195頁。5月。山川出版社。一八〇〇円）

大和猿楽を生み出した大和という「土壌」に着目し、奈良坂・春日野・石上・布留・三輪・初瀬・当麻・越智といった「場」を切り口として、能の作品・歴史を縦横に論じた書。世阿弥の奈良意識、奈良豆彦神社翁舞の民俗性、〈重衡〉〈海人〉〈采女〉〈春日龍神〉〈井筒〉〈布留〉〈三輪〉〈玉鬘〉等の作品と中世の宗教世界との関わり、秦河勝をめぐる伝承、観世元雅の歴史的位置づけなど、実に幅広いテーマを取り上げる。一般向けの書ながら、中世の南都で大きな力を持っていた律宗と能作品との関わりなど、興味深い問題点を数多く提示し、研究面でも意義深いものとなっている。なお、佐藤和道による書評が『能と狂言』10号に載る。

『謡曲入門』（伊藤正義著。A6判323頁。5月。講談社学術文庫。一〇〇〇円）

短編ながら、含蓄に富んだ珠玉の作品研究の数々を収め、名著の誉れが高かった伊藤正義著『謡曲雑記』（和泉書院、平成元年刊）の文庫版。文庫化にあたって、各論の冒頭に、曲の概要と研究的意義を記した前付、巻末に解説が付される。前付は川島朋子・恵阪悟・中嶋謙昌、解説は大谷節子による。長く絶版であった本書がこうして入手しやすくなったことは大変喜ばしい。なお、『謡曲雑記』に所収の「熊野絵巻」影印は、今回の文庫には収録されていない。

Hosei University Repository

『幽き花―片山慶次郎追悼集―』（諧声会［京都大学観世会OB会］編。A5判146頁。5月。私家版。非売品）

平成二十二年に亡くなった観世流シテ方・片山慶次郎の追悼文集。能界の関係者、教えを受けた京都大学観世会のメンバーの追悼文のほか、平成二十二年執筆の遺稿八編等を収める。

『松坂屋コレクション能装束能面展』（国立能楽堂調査資料係編。A4判111頁。9月。日本芸術文化振興会）

平成二十三年度国立能楽堂特別展示の図録。J・フロントリテイリング史料館が保管する松坂屋コレクションの能面四十二面、能装束五十九領の写真とデータを掲載する。冒頭には、同コレクションの能面・装束の概要について解説した田邊三郎助「松坂屋コレクションの能面について」、門脇幸恵「松坂屋コレクションの能装束」を収める。それによると、能面は昭和十一年に売り立てられた加賀前田家旧蔵の能面がほぼ一括して入ったものであるが、能装束は伝来が様々で、金春家伝来の厚板のほか、東本願寺・加賀前田家・備前池田家・仙台伊達家・越前松平家・肥後細川家・臼杵稲葉家伝来のものなどが混在しているという。

『風姿花伝』（市村宏訳注。A6版272頁。9月。講談社学術文庫。九二〇円）

昭和四十四年に桜楓社から刊行された『能楽論』の文庫版。前著のうち、能楽についての概説をまとめた四十五頁分を省き、『風姿花伝』の本文・注・訳・解題と、『花鏡』の翻刻を収める。

『日本の楽劇』（横道萬里雄著。A4版548頁。12月。岩波書店。一五〇〇〇円）

著者の序文によれば、「日本の楽劇の多様な形と、その面白さを、多くの方々に知って頂きたいと考えて」書かれた書。第Ⅰ部「歌舞伎」、第Ⅱ部「文楽」、第Ⅲ部「能楽」、第Ⅳ部「沖縄楽劇」、第Ⅴ部「寺事」から成る。「能楽」の記述は全体の約七分の一で、狂言〈靭猿〉〈釣狐〉、能〈井筒〉〈道成寺〉の舞台進行に則した解説と、舞台・役者・役柄・装束・面・演目・音楽など、能楽全体の解説。本書の末尾に掲載の「あとがきに代えて」は、長年にわたって日本の楽劇研究を牽引してこられた氏の自伝というべき内容であるが、同時に戦後能楽史の貴重な証言ともなっている。なお、山中玲子（『国語と国文学』13年1月）、徳丸吉彦（『楽劇学』20。13年3月）の書評がある。

『まんがで楽しむ狂言ベスト七十番』（村尚也文・山口啓子漫画。A5版293頁。12月。檜書店。一二〇〇円）

『まんがで楽しむ能の名曲七〇番』の続編。狂言七十番のあらすじをマンガにして描いたもの。序に「ただの筋追いまんがから脱却して、鑑賞の参考にも、またこれだけを読んで

Hosei University Repository

も狂言世界を楽しめるように工夫」したとあるように、狂言にはない台詞を随所に交えるなど、いろいろと効果的な工夫がなされている。各曲の前付には、流儀による曲名の表記の違い、素材となった説話のことなど、やや専門的な解説も載る。

（宮本）

【資料研究】

まずは、能楽論から紹介する。宮本圭造「戦国期能伝書の伝来をめぐる一考察―『聞書色々』と『細川十部伝書』―」（『能楽研究』35。3月）は、金春欣三旧蔵で現在、法政大学能楽研究所が所蔵する『聞書色々』全文の翻刻と共に、本書の内容や伝来・成立の経緯について、奥書などから詳しく分析・検討したものである。同書は江戸中期の写本ながら、世阿弥伝書『風姿花伝』『五音下』『音曲口伝』や、観世大夫元広・弥次郎長俊からの聞書に基づく能伝書、観世小次郎信光在判の謡伝書、宮増伝書など、戦国期以前に遡る複数の能伝書が抄写・合写された観世座系統の伝書である。同論文でとりわけ注目されるのは、この『聞書色々』には、もともと十九冊以上からなる一群の伝書の一部であった『細川十部伝書』のツレが収められていると推測・考証している点にある。『聞書色々』の中核は、黒政右兵衛が西村満斎から相伝された伝書であることが奥書に示されているが、同論文では西村満斎は若狭武田氏の被官・西村与三右衛門（宮増弥左衛門の鼓の弟子と思われる）の息子か一族であり、これらの伝書が後に丹後細川家にもたらされ、さらに分家の宇土細川家にも所蔵されて、元禄頃に金春重栄による伝書蒐集の一環として宇土細川家本が転写され、金春家に伝わったものであろうと考証している。戦国大名とその被官人達の間における能楽受容の実態を具体的に示すと共に、真嶋宴庵が『聞書色々』所収伝書の記事を披見していた可能性にも言及しており、能伝書が解体・改変・再編を経て『実鑑抄』系伝書などの成立に至る歴史までを視野に入れた重要論文となっている。

謡本については、伊海孝充「能楽研究所河村隆司文庫蔵金剛流十番綴謡本の紹介と考察」（『国立能楽堂調査研究』5。3月）がある。現存数も僅少な金剛流謡本の中で貴重な、金剛久則の署名を持つ江戸中期頃写の修羅能十番を収める謡本や、久則の経歴について考証する。同謡本について、久則が実質大夫を退いていた享保十七年（一七三二）以降に贈呈用に書写された可能性を指摘した上で、現行金剛流謡本や能楽研究所蔵岩本秀清節付下掛謡本と比較検討し、この頃には現行の金剛流の詞章がほぼ完成していたことや、金剛流の詞章がもとは岩本本のように今より上掛りに近似していた可能性を推測している。また、久則自身が修羅能を得意としていたことが本謡本の背景にあるとする。なお、金剛家系図の中で従来あまり注目されてこなかった、系図学者・鈴木真年（一八三一～九四）編『鈴木叢書』（東京大学史料編纂所蔵）中の金剛家系図二種の意義にも言及しており、付として、国立能楽堂蔵河村隆司氏寄贈資料38点の目録も掲載されている。

Hosei University Repository

続いて、謡名寄や謡本注釈などの資料紹介を挙げる。大山範子「古典芸能研究センター伊藤正義文庫蔵「正徳四年謡名寄」（紹介と翻刻）」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』4。3月）は、「正徳四年八月十三日書」の奥付を持つ伊藤正義旧蔵の謡名寄の紹介。内容は、元禄十年（一六九七）刊『能之図式』巻六「下掛謡之目録　国付」に近いとされ、翻刻と共に『能之図式』所収曲名との対照表が付されている。多くは曲名の右肩に国名が記されており、国別名寄の形成過程を考える上でも参考となる名寄とみられる。謡本注釈に関わる資料としては、小林保治・石黒吉次郎編『謡曲画誌　影印・翻刻・訳註』（勉誠出版。2月）が出ている。早稲田大学演劇博物館蔵の享保二十年刊『謡曲画誌』の影印・翻刻を掲載し、註釈や現代語訳、解説などを付したものである。『謡曲画誌』は謡曲五十番を絵入りで解説した啓蒙書で、解説では、本書の出版経緯や著者中村三近子の所伝についても考証されている（【単行本】参照のこと）。その他、能の中での間との応答に関わる資料紹介に、飯塚恵理人「〔翻刻〕豊嶋要之助筆『高安流　間狂言応答』（三）」（『古代中世文学論考』25。3月）がある。昭和十六年に豊嶋要之助が広島で書写した間狂言の応答問答をまとめた本の翻刻連載三回目で、〈海人〉以下〈道成寺〉まで四十三曲分の狂言問答が収められている。

演出資料関係では三本。山中玲子・深澤希望「鴻山文庫・般若窟文庫蔵能型付一覧および収録曲仮索引」（『能楽研究』35。3月）は、鴻山文庫と般若窟文庫の型付資料をリストアップすると共に、その内容を所収曲によって検索することができる索引を作成したもの。演出研究において型付を検索する際に役立つものとなっている。喜多真王「翻刻『舞曲寿福抄』後藤得三本（二）」（『国立能楽堂調査研究』5。3月）は、同3号に掲載された喜多七大夫古能による演技・演出関係伝書の翻刻の続き（『国立能楽堂調査研究』6・7・8まで分載されて完結）。今回分には、〈猩々乱〉〈道成寺〉〈石橋〉などに関する演出記事が詳細に記されている。また、飯塚恵理人「豊嶋十郎筆『高安流仕舞附　人』（八）」（『名古屋芸能文化』21。12月）は同誌で連載されてきた高安流の豊嶋十郎筆のワキ方仕舞附〈全体は、天・地・人の三冊〉の翻刻紹介で、本号には人冊の〈住吉詣〉以下二十八曲分の仕舞附が掲載されており、これで全冊完結になる。

続いて、近世能楽史に関わる資料紹介二本。まず、青柳有利子・江口文恵・中尾薫・柳瀬千穂・入口敦・竹本幹夫・棚町知彌「『葛巻昌興日記』所引能楽関係記事稿（二）」（演劇博物館グローバルＣＯＥ紀要『演劇映像学２００８』第4集、3月）は、同紀要『演劇映像学２０１０』第4集、金沢藩主前田綱紀に近侍した葛巻昌興の日記から能楽関連記事を抜き出し、解説を加えるもの。本稿では、徳川家綱没後の延宝八年八月十日から、延宝九年四月二十九日までの能楽関連記事を紹介しており、五代将軍綱吉の将軍宣下祝儀能の準備の様子などがうかがえる。綱紀が永正二年（一五〇五）の粟

Hosei University Repository

田口勧進能の上演曲について下問していたことなども興味深い。

また、大谷節子「『文化十四年幸橋勧進能仕様留帳』解題と翻刻」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』4。3月）は、観世大夫清暘が文化十四年（一八一七）春に江戸幸橋御門外に建築した勧進能舞台の木材仕様等を記す大槻文蔵所蔵資料の解題と翻刻。同紀要の「伊藤正義先生追悼」という特集号で、ゆかりの古典籍を紹介している中の一本で、翻刻については、作成中のまま遺された伊藤正義の草稿に補訂を加えたという。建築建材の寸法等がかなり詳細に記されており、舞台史・建築史上、貴重な記録とみられる。解題では、国会図書館の『勧進能書留』や観世文庫の関係史料等もふまえ、この勧進能の経緯や、勧進能に出勤した役者の一人で、本書の書写者と思われる木下正三郎についても考証されている。

近代能楽史に関わるものでは、初代梅若実資料研究会「初代梅若実筆『芸事上数々其他秘書当座扣并ニ略見出シノ事』翻刻（一）」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』22。3月）がある。初代梅若実が、実子の初代万三郎と六郎（後の二代実）に宛て、明治四十年末までの約一年間程の間に記したと思われる自筆文書（梅若玄祥所蔵）の翻刻紹介（冒頭からおよそ1／3程まで）である。内容は、能に関する秘事や記録・回想・系図・心覚・口伝・故事など多岐に及ぶ。記載順などは整然としてはいないものの、初代実の関心事をよく物語る好資料で、『梅若実日記』だけでは知られない内容も含め、梅若家や明治期能界に関わる記録として注目される。同紀要22～25号に翻刻が連載され、26号に解題・索引が掲載されている。また、小林責「「青山大宮御所御能御用係顛末」正誤」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』22。3月）は、同紀要16号掲載の同氏による論文の訂正。青山御所の御能に天皇の臨幸があったのは明治十一年七月の舞台披きの時だけ、と前稿に記しているが、そうではなく天皇が赤坂離宮の仮皇居から新宮城に還御するまでの期間、基本的に毎回であったとする。そして、このことが芝能楽堂新設の背景の一つにあったとする池内信嘉の伝聞説を再評価する。また、青山御所御能に関わる役者五名の職名は「御能御用達」が正式名称で、それは宮内省側の担当者「御用掛」と区別されていたことを補足・訂正している。

楽器や能装束に関わる資料紹介としては、以下三本の論文がある。高桑いづみ「紀州徳川家伝来の龍笛・能管について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』166。3月）は、国立歴史民俗博物館が所蔵する紀州徳川家伝来の龍笛・能管計二十七本について、X線透過撮影なども含めて調査した報告。能管について男女川・賀松の二本、そして能管とも龍笛ともつかぬものとして小枝という笛を紹介している。男女川については、笛森田流二世庄兵衛光時が楽笛を能管に作り直させ愛用したものという由緒書も紹介されている。同じく高桑いづみによる「翻刻と解題『横笛細工試律便覧』」（国立文化財機

Hosei University Repository

構東京文化財研究所無形文化遺産部プロジェクト報告書『無形文化財の伝承に関する資料集』同無形文化遺産部編・発行。3月)は、明治二年(一八六八)に富田親成が著した能管製作書(藤田六郎兵衛蔵)の翻刻紹介。富田親成は笛方森田流で学び、笛の構造に関心を持つようになった人物だという。彩色された詳細な能管図が多いため、巻末にカラー図版が掲載されているのはありがたい。また、門脇幸恵「国立能楽堂調査研究」5。3月)は、高島屋史料館と国立能楽堂に保管される加賀藩前田家伝来能装束の畳紙に墨書された記事を紹介(後者については畳紙十一点全ての写真も掲載)し、そこにみえる個人名(前田斉泰の正室溶姫や、斉泰の妹壽正院など)や、装束文様に関わる表記について検討したものである。

続いて、国語学に関わる論文。宮本淳子「金春禅竹筆『五音三曲集』における用字法について」(『東京女子大学紀要論集』62―1。9月)は、禅竹自筆本『五音三曲集』で使用されている平仮名字母を調査し、世阿弥自筆本の場合と比較すると一音一字母の割合が低いことや、使用字母の違いの傾向を具体的に指摘、特に一音二字母の使用字母について二種類の使用頻度別に分類した上で、語頭・非語頭での使用傾向などを分析したもの。また、金子彰・宮本淳子・石黒のぞみ編「世阿弥自筆能本『松浦之能』語彙総索引稿」(『東京女子大学日本文学』107。3月)は、『世阿弥自筆能本集』(岩波書店)の影印に基づき作成された、自筆能本『松浦之能』に用いられている全ての語の索引で、本文の語と演出注記類の語に分けて索引が掲載されている。

最後に、様々な分野にわたる資料紹介として、月刊『観世』見返しで連載中の「観世文庫の文書」にふれておく。以下、この年に紹介された観世文庫保管資料を、順に挙げる(括弧内は担当執筆者)。「伊勢伊勢守貞孝筆『能故実書』」(落合博志)、「宝暦十二年『萬輝宗旭法名下炬授与書』」(長田あかね)、「観世元章手沢紺表紙一番綴謡本『賀茂』」(高橋悠介)、「装束古裂帳」(小川剛生)、「江村家旧蔵鸚流狂言本」(橋本朝生)、「観世左近・三十郎宛観世新九郎書状」(宮本圭造)、「元文五年十一月十二日於二丸御能「関寺小町」演能次第」(横山太郎)、「無刊記観世流五番綴謡本(正徳弥生本)」(伊海孝充)、「一噌平岩一札写」(高桑いづみ)、「『副言巻』第九冊草稿」(橋場夕佳)、「田安於御屋形御面写数御謡本章数御咄之事共承り候趣色々御意を書留ル」(柳瀬千穂)、「明治期写部分謡本「木曽願書」」(恵阪悟)。(高橋)

【能楽論研究】

世阿弥能楽論の研究から紹介する。天野文雄「「一切の事(コト)」と「一切の事(ジ)」―世阿弥と禅の出会い、『問答条々』『花修』『別紙口伝』の改訂など―」(『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』4。3月)は、『花伝』改訂に関する論文で、世阿弥能楽伝書における「一切の事」の「事」の読みについて、「コト」「ジ」の二様がある点に着目し、

Hosei University Repository

「ジ」と読むのは禅林の影響によるものであることから、世阿弥が禅に出会った時期の下限を元次相伝本『別紙口伝』の奥書年紀の応永二十五年六月と推定し、『問答条々』の「一切の事」二例は当初「イッサイノコト」と読んでいたのを後に「イッサイノジ」と読みかえたと推測する。

『鍐仙』に世阿弥伝書に関わる論文が二本。いずれも興味深い指摘が見られる。岩崎雅彦「「田夫・野人」覚え書き」（602。5月）は、物学条々序文にある「田夫」「野人」について、世阿弥能楽論や能作品のほか、他分野の文献からも用例を博捜し、上記の二語が伝統的に対をなす定型の組み合わせであることを指摘する。田口和夫「申楽談儀第23条「宝生の座と、うち入〳〵あり」は誤り」（599。1月）は、表章『昭和の創作「伊賀観世系譜」　梅原猛の挑発に応えて』（平成22）読後に気づいた点を指摘したもので、『世阿弥十六部集評釈』以来疑問を有しつつも論題名にある如く校訂されてきた当該箇所について、新たな本文解釈を提示している。「宝生の座」については表記「はうしやう」の開合の問題から、以前落合博志がで提起した「坊城の座」説（『能と狂言』5。平成19）を支持し、「うち入〳〵あり」は竹本幹夫紹介の吉田文庫蔵堀本書き入れ（『能と狂言』8。平成22）の「入」の校異が「イロ」であることを根拠に「氏色々有」であるとする。きわめて重要な指摘であるとともに、現存伝本の問題もあり不明な点を多く残す『申楽談儀』が、堀本書き入れによって正しい本文により近づけることも証明した。『三道』が吉田文庫蔵松廼屋文庫本影写本を底本としたテキストの刊行に至ったように（角川ソフィア文庫。平成20）、『申楽談儀』についても堀本書き入れを取り入れた新しい校訂テキストや注釈書が俟たれる。

原田香織「世阿弥『金島書』における「祝言」の問題」（『文学論藻』85。2月）は、同書の全八篇についてテキストや素材を分析した上で、世阿弥の執筆姿勢が身の潔白を示すものであり、作品全体が祝言に収斂する構成になっていると考察する。増田裕美子「花の芸術―中世芸能への一視点―」（『二松學舎大学人文論叢』87。10月）は、『花伝』を主とした世阿弥の能楽論書、立花・茶の湯の芸論書の記述や引き歌等を手がかりに、中世の芸能における花のあり方について論じる。

禅竹能楽論研究では、高橋悠介「禅竹能楽論における「一露」「一水」と胎生学」（『能と狂言』9。4月）が、「六輪一露説」について新たな見解を示す。従来中世神道説に基づくとされてきた「一露」「一水」が、もとは胎内五位説における第一段階「羯頼藍」に見えることを小川豊生らの先行研究を紹介しながら指摘し、禅竹能楽論のルーツとされる中世神道説も実は胎生学の影響を受けており、能楽論に胎生学の用語が入ってきたのは、胎生学を取り込んだ音律論の影響を受けたものであると考察する。「六輪一露説」の「息」についても胎内五位説との関連を考えるなど、禅竹能楽論の理解に新視点を加え、研究を大きく進展させる論考である。

Hosei University Repository

重田みち「一条兼良の「猿楽」表記説と「申楽」表記説―『六輪一露之記』兼良注及び『申楽後証記』の記述―」（『鍊仙』601。4月）は、一条兼良の「さるがく」に「猿楽」「申楽」両表記が見られる点について、『六輪一露之記』の兼良による注では「猿楽」表記の由来を説くが、後の『申楽後証記』では「申楽」表記についても根拠づけを行い、「猿楽」「申楽」のいずれも認めていると論じるほか、前掲二書に見られる語「嘘楽」が「嘘楽」「嚇楽」（きゃくがく）の誤りであることを指摘する。

そのほか、白洲正子が能楽関係著書執筆を起点として民俗学に傾倒し、柳田國男・小林秀雄らと接点を持つ過程を論じた野村幸一郎「白洲正子の能楽論―日本文化へのまなざし」（『女性歴史文化研究所紀要』19。3月）がある。（江口）

【能楽史研究】

まず学会での企画やシンポジウムなどの報告を取り上げる。能楽学会『能と狂言』9（4月）には、前年5月の大会での企画「能・狂言面研究の現在と未来」に関する報告が掲載されている。田邉三郎助「能面らしい能面の形成と伝承作家の問題」は、赤鶴と鬼面、龍右衛門と女面についての考察。まず面作者の一透と赤鶴が別人であることを確認し、宝生流本面の大悪尉や観世宗家の小癋見などと赤鶴との関係を探っていく。女面に関しては、その形成が中世に実在した女性の美化によるものという説を示し、龍右衛門作とされる雪の小面に関する諸説を整理する。そして現在雪の小面とされている面は、その実否はともかく、桃山から江戸初期に完熟した能の若い女面の美しさを代表するものではないかと述べる。大谷節子「面に刻まれた能の歴史」は能面とその作者をめぐる問題を取り上げる。すでに『申楽談儀』にも能面作者に対する関心が窺えるものの、個々の面の作者は必ずしも明確ではなかったが、江戸時代になって幕府に提出する書上に面の作者を記す必要が生じて面の作者が比定されるようになったことを、金春家所蔵の翁面が聖徳太子作とされていく経緯を辿りながら説明する。そして「十作」と呼ばれる面作者が揺れ動きながら定まっていく様子を考察し、能面の種類がほぼ出揃って写しの時代になると古面の極めが重要になり、その作業も面打家が担ったと指摘する。能面には能の歴史が刻まれており、刻銘・焼印・墨書といった面の文字情報を集積・解析するなど、能楽史解明のためにも能面調査が必要であることを説く。このほか観世鍈之丞と山本東次郎の対談「演者と面」（進行役は山中玲子）も収録される。観世鍈之丞は、初面の時に使った「早蕨」という面に対する思い入れの深さや、師匠・先輩の演技をイメージしながら稽古して面の使い方を考えていくことを語る。山本東次郎は狂言面が能面の崩しであることを具体例によって説明し、面に呼応するだけの芸位が必要であり、狂言面は狂言の芸の基準となる物的証拠だと述べる。

『演劇学論集　日本演劇学会紀要』53（11月）には、前年11

Hosei University Repository

月に奈良で行われた研究集会でのシンポジウム「能という演劇の演出と芸風を考える―奈良ゆかりの金春流の場合」の報告が掲載されている。まず天野文雄と金春康之の講演があり、天野は「金春大夫安照の生涯と芸風」と題して豊臣秀吉の愛顧を受けた安照の役者としての立ち位置や活動を紹介している。『舞正語磨』にその芸風が「吉野の山にてふりよき松を見るやうなり」と評されることや、『岡家本江戸初期能型付』に見える安照の演技から、その芸風を探ろうとする。金春康之「金春流の主張―その演出と芸風が目指すもの―」は現在の金春流の特徴を小書が少ないことと写実的な演技が多いことの二点から論じている。小書が少ないのは新鮮な珍しさを求めるよりも自然な内面のドラマを尊重するためであり、写実的な演技は明確で力強いリアリティを生み出そうとするためだと説明する。講演後の二人の対談では観世流の映像を見ながら金春流との違いを分析しようと試みるが、時間の制約があったことが惜しまれる。

『演劇映像学２００９報告集２』（３月）には平成21年12月に早稲田大学で行われた国際シンポジウム「演劇舞台構造の国際比較研究会」の報告が掲載されており、能舞台に関する報告が二本含まれている。竹本幹夫「日本の散楽・猿楽が鑑賞される場について」は、散楽が庭上や屋内など場所を選ばず演じうる芸能だったことや、寺社での猿楽が専用の舞台をもたないのが本来だったことをまず紹介し、やがて猿楽が商業的な興行の性格を帯びるようになって見やすい高さの舞台や料金徴収が可能な仮設の商業劇場が生まれて来ることを論じている。宮本圭造「能舞台の歴史と変遷―能の劇場における桟敷と舞台―」は、まず屋外舞台の白州に注目し、貴人の見物席である桟敷と演能の場である舞台を区別して両者を隔てる仕切りとしての役割が本来の機能だったと指摘、そして神事能・勧進能・御殿の三つの舞台を考察する。神事能の舞台は仮設が本来の形であって近代の常設劇場へと直結するものではないこと、勧進能の舞台は桟敷中心のものや平土間中心のものなどがあって常設舞台で行われる例もあったこと、御殿の舞台は表舞台と奥舞台があったが私的な遊興の場である奥舞台が能の室内化と関わることなどが指摘される。明治になって芝能楽堂が開設されるが、江戸城の奥舞台が参考とされた可能性が高いことを明らかにして、能楽堂が小規模な劇場空間としてスタートしたことが、能が商業演劇として成立しえない背景となったのではないかと推測する。

新潟大学人文学部『佐渡・越後文化交流史研究』11号には、同学部と佐渡市教育委員会との間で連携協定が締結されたことを記念して佐渡で行われたシンポジウム「世阿弥と佐渡の能楽」の詳細な報告が掲載されている。このシンポジウムでは３人が講演を行った。今谷明「世阿弥の時代―佐渡配流の背景を中心として」は、世阿弥が生きた時代は将軍権力が安定して商工業や文化が発展した時代だったことをまず説明する。やがて将軍義教は大和の土豪越智・箸尾と対立しこれを攻撃する事態となったが、世阿弥の子の元雅が越智と関わり

Hosei University Repository

を持っていたために世阿弥も連座して佐渡に流されたのではないかと推測する。天野文雄「世阿弥と佐渡―『世阿弥晩年期』の再検討」は世阿弥が永享8年に佐渡から帰還した可能性を指摘し、帰還後の能役者・能作者・伝書著述者としての世阿弥の活動を考える必要があるとする。手掛かりが乏しい部分だけに困難ではあるが、〈関寺小町〉がこの時期の作である可能性を指摘するなど、興味深い話となっている。小林責「佐渡の能楽」は、佐渡に居住した面打一透の話を皮切りに、春日神社神事能が定着して本間が能大夫家として確立する様子、明治維新期に富農が修業のため東京に出向いたり東京の役者が佐渡に避難したりした様子、潟上派と西三河派との確執が佐渡の能楽を発展させたことなどを紹介する。明治から現代に至る佐渡の能楽史の重要なポイントをわかりやすく説明した内容となっている。講演後の質疑応答では会場からの質問に講演者が丁寧に回答している様子も記されている。

羽田昶「披くということ―能の大曲・秘曲を演じる意味」〈武蔵野大学能楽資料センター紀要22。3月〉は、同センター公開講座での話をまとめたもの。各流の習物を検討することにより「披く」ことの意味を考える。まず各流の演目の階梯を比較しながら紹介し、習物をA群からD群のグループに分けてそれぞれを考察する。A群は5曲の老女物で、流派によって5曲の位置づけが異なることや、明治以後の老女物上演に変化が見られることを指摘する。B群は〈道成寺〉など青年期や青年期を脱してから比較的早い時期に披く曲で、身体技法を確実に体得するために必須のカリキュラムだとする。C群・D群は作品への深い解釈と高い演技力を必要とする曲で、能の催しに多く登場するこれらの曲を充実した力で演じるためにB群があり、C群・D群の曲を演じ抜いた果てにA群があるとして、習物の持つ意味を説明している。

法政大学国文学会『日本文學誌要』84（7月）は「表章先生追悼特別号」。西野春雄・山中玲子・味方健・樹下好美の追悼文のほかに、「表先生の仕事」として、竹本幹夫「能楽資料収集・能楽資料研究」、天野文雄「能楽史研究〈世阿弥時代〉」、小林健二「能楽史研究〈近世〉」、田口和夫「能の作品研究・謡曲研究」、重田みち「世阿弥伝書研究」、永井猛「狂言研究」が掲載されている。能楽史研究のみならず能楽の様々な分野の研究を進展させたことや、その基盤には資料研究があったことなどがあらためて認識させられる。

同誌には宮本圭造「呪師走りと「翁」―「翁」の成立をめぐる二、三の問題」も収録されており、〈翁〉の成立について新たな見方を提示する。従来〈翁〉が「呪師走り」と呼ばれていたことから呪師の芸能から発生したとする説が有力とされているが、〈翁〉を「呪師走り」と呼ぶのは興福寺の用例のみで、むしろ特殊な事例ではないかと疑問を提示する。そして、寺社の祭礼に呪師と猿楽がペアで参勤する記録が多く存在することから、呪師と猿楽は補完し合う性格のもので、両者が一体となって除魔招福の芸能を演じたとする。また現行の〈翁〉の詞章が戦国期までしか遡れず、民俗芸能を視野に入れ

Hosei University Repository

ると本来の〈翁〉の詞章がかなり異なるものだったと考えられることや、伊勢の一色の翁舞などを参考に呪師の芸が〈翁〉の露払い的な役割を担っていた可能性を指摘する。また猿楽が呪師の芸を引き継いだ場合もあるが〈翁〉はあくまでも猿楽の持ち芸だったこと、呪師が猿楽芸に進出した例もあることを明らかにする。興福寺で〈翁〉を「呪師走り」とするのは、もとは並列だったものが、呪師が参勤しなくなった後も名目だけが残り、翁が呪師走りに含まれるものと誤解されたことである可能性を説いている。

呪師の芸に関しては大東敬明「真福寺本大須文庫所蔵『中堂咒師作法』考―法咒師研究の一助として―」（芸能史研究192。1月）もある。これは『中堂咒師作法』の分析を通して咒師作法の全体像を明らかにしようとするもの。まずこの書が天仁元年の奥書を持ち、長宴が安賢から習ったものであること、同内容を持つものに青蓮院吉水蔵『南教令　法咒師次第口伝』があることを紹介する。そして記された作法は延暦寺根本中堂のもので、修正会において1月1日から14日まで行われたものであることを明らかにする。作法を東大寺・興福寺・薬師寺の修二会や国東半島諸寺の修正会と比較することにより、これらが共通の基盤を持っていたと考えられることを指摘。「走り」や「追毘那野迦法」の検討からも京都や奈良の諸寺の行事との共通性が見られ、今まで断片的にしか知られていなかった咒師作法を具体的に伝える本書の記事が、咒師作法の基準の一つとなるとしている。

この年も近世能楽史に関する論文が目立った。宮本圭造「臼杵藩の能楽史―国立能楽堂等蔵江戸前期能番組を紹介して―」（国立能楽堂調査研究5。3月）は豊後臼杵藩の能楽への取り組みを江戸前期中心に考察したもの。鴻山文庫に所蔵されている素性不明の能番組と国立能楽堂所蔵の能番組が一連のものとの推測から始まり、他所に蔵されている同種番組を掘り起こし、それらが臼杵での能番組であることを解明していく過程が詳しく記される。さらに臼杵藩の藩政文書を活用しながら臼杵藩の能楽史を明らかにするが、下間少進の指導を受けた二代藩主稲葉典通の時から能楽が盛んになり、四代信通が肥後中村家の中村伊織に師事して臼杵藩の能楽が最盛期を迎える様子などが考察されている。藩主がシテの中心となって藩士が諸役を担当する演能態勢や、寺で行われる法事能を町人に見物させるという特色ある催しなど、具体的な取り組みの様子を窺うことができる。能楽史年表や能番組の翻刻も付されている。

西村聡「『大野木克寛日記』から見た加賀藩中期の能楽」（芸能史研究194。7月）は、この年4月に刊行された加賀藩の上級武士である大野木克寛の享保元年から宝暦4年の38年間の日記を基に加賀藩の能楽の様子を考察する。この時期は藩主が短期間で交替したため、5代綱紀から10代重教までの時代に渡る。日記に記された能楽の催しの多くは『加賀藩史料』にも記載されているが、日記の方が具体的で記述が正確な場合も多く、日記によって加賀藩の能楽の実体がより明確

Hosei University Repository

になることが、様々な具体例を通して示されている。財政再建から藩の能楽の催しが減らされるが、一時期はまた増加に転じるなど藩自体の能楽への取り組みも揺れ動いていた様子が窺え、藩士たちは謡や仕舞の稽古に励み、催しを行っては互いに見物するなど一向に熱が冷めない様子も伝わってくる。江戸や京都の催しの番組を熱心に日記に書き留める克寛の態度からは能への思いの深さが感じられる。日記の刊行意義の大きさはもちろん、加賀藩と能楽との関わりの強さや、それを伝える資料の多さをあらためて認識させられる。

喜多真王「元禄の能役者俳人本間主馬(俳号丹野)」(能と狂言9。4月)は、芭蕉と交流があったことから俳諧研究では取り上げられることがあるが、能役者としての活動はあまり注目されていない人物に焦点を当てる。俳諧側の資料と能楽側の資料を取り交ぜながら、主馬が大津、後に京都に住んだ宝生流の能役者であり、奈良の神事能や伊勢の勧進能に出演し、大津では自ら勧進能を催したことを明らかにする。一方で主馬の俳諧活動を丁寧に辿り、俳人としての側面も明確に示されている。雑俳点者になる実力を持ちながらも大名家のお抱え能役者になることを望んだ人物の様子が丹念に描かれた論文である。

米田真理「彦根藩井伊家による能面購入の経緯　能面売買に関わるヒト・モノ・カネ」(能と狂言9。4月)は文化8年に井伊家が福山藩主阿部家から能面を購入した経緯を、喜多健忘斎と彦根藩士河北勝兵衛との書簡などに基づきながら考察する。健忘斎は仲介役であり、売り手も買い手も伏せられた形で交渉が行われるが、健忘斎からかなり詳細な情報が井伊家に寄せられている様子が明らかにされ、多数の面をセット売りしたい阿部家と良い面だけを選り抜きにして購入したい井伊家の思惑を、仲介役が巧みに調整していく様子が窺える。健忘斎は面の鑑定をも行うが中立的な立場での鑑定とは限らないなど、能面売買のビジネス的側面が緻密に考察されている。大夫を引退した健忘斎にとって仲介手数料は重要な収入源だったとする点も、能役者の活動を考える上で興味深い指摘である。

関屋俊彦「文政九年大坂勧進能と金春安住」(神戸女子大学古典芸能研究センター紀要4。3月)は、同年8月26日から30日まで難波新地で行われた金春惣右衛門主催の勧進能の考察。伊藤正義所蔵の配布能組と『甲子夜話』『摂陽奇観』所収の番組とを比較し、『安住行状大概』の記事をふまえながら勧進能の細部を検討している。文政5年に勧進能を大成功させた金春八左衛門安住が病気療養中にもかかわらず担ぎ出された経緯や、当日までの準備の進み具合、収支が紹介され、6日間の番組が細かく考察されている。朝8時前後から始めても日没までに予定の番組を消化できず、一部の演目を取りやめたり能の一部分を省略したりする日が多いのに驚かされる。病身を押して働いた安住の収入はわずかなものだったが、流儀繁栄のために尽力する安住の存在の大きさがよくわかる。

Hosei University Repository

近代の能楽史に関わる論考も増加している。西村聡「『歌行燈』を能楽で読む」（金沢大学連携融合事業日中無形文化遺産プロジェクト報告書10。3月）は、泉鏡花の小説の背景にある能楽を考察しながら作品を読みこんでいく。参宮の仮の館で一調を催す「侯爵津の守」について、実在の人物に該当する人はいないが、能楽への関わりが深かった徳川義禮と養父の松平慶勝を接合した呼称かと推測し、伊勢の山田能楽界の活況が反映していると見る。また登場人物で小鼓名人の雪叟には三須錦吾像が利用され、同じく登場人物で能役者の恩地源三郎には宝生九郎や松本金太郎などの像が融合されているとする。源三郎の甥の喜多八が芸妓のお三重に〈海人〉の謡や舞を教えたり、お三重が雪叟の鼓と源三郎の地謡で玉の段を舞ったりすることと能楽界の規約との関わりを検討するなど、作品成立当時の能楽界の様子がいろいろな形で作品に反映されていることがあらためて浮き彫りにされている。

研究助成プログラムの成果として大連における能楽に関する二つの論考が出された。プログラムの代表である仲万美子「歌舞伎、文楽、能楽の大連公演（1935年）は誰によって鑑賞／支援されたか―現地刊行の新聞報道記事からみた分析―」（総合文化研究所紀要28。3月）は、昭和10年に大連で行われた古典芸能の催しに焦点を当て、新聞記事を紹介しながら分析を行う。能楽に関しては、大連機械製作所専務取締役森川荘吉の尽力により大連能楽殿が建造された経緯、舞台披きとして宝生重英・宝生新など20名を超える役者による催しが2日間にわたり行われた様子、この一行は大連のみならず京城・新京・奉天・青島・上海でも演能会を行ったことなどが報告されている。大連に古典芸能に親しむ人が多かったことが興行の成功につながったことがわかる。

中嶋謙昌「大連能楽界の形成―二十世紀初頭の植民地都市と能楽―」（芸能史研究194。7月）は謡愛好者の社中が大連に形成されていく様子を詳細に考察する。社中の形成は日露戦争頃に愛好者が集まって謡を謡うことから始まった。戦争終結後に観世流は指導者を大連に招聘する形で指導環境を整え、宝生流は大連居住者が指導者となって社中を牽引するようになる。やや遅れて喜多流も指導者を獲得するようになったが、狂言や囃子の指導者には恵まれなかった。やがて大連能楽会が結成されて能楽の催しも行われたものの、囃子を入れず素謡に合わせてシテ・ワキなどが所作を見せる「素能」と呼ばれるものが多かったことを指摘している。遠隔地で苦心しながら能楽に取り組んだ人々の様子が窺える。

田﨑未知「筧鉱一文庫蔵「岡村保道能楽資料」―能楽資料から見る喜多流史―」（名古屋芸能文化21。12月）は、大正から昭和にかけて三重県を中心に活躍したシテ方喜多流能楽師の資料を紹介し、喜多流に関わる出来事を考察する。岡村保道は自身が主催する会の会員名簿や催会記録、番組・謡本・型付など39種の資料を遺した。これらを利用しながら『大成喜多流謡曲定本』刊行や復曲・廃曲などの事柄を取り上げるが、特に喜多能楽堂再建に向けての取り組みが詳しく考察さ

Hosei University Repository

れている。保道が弟子に送った文書からは、東京に能楽堂が再建されても余慶を蒙る可能性は少ないのに多額の寄付募集責任額を割り当てられた保道の困惑が窺えて興味深い。

先に取り上げたもののほかにも能面に関する考察が存在する。保田紹雲「中尊寺の「秀衡悪尉」面について」（名古屋芸能文化21。12月）は、中尊寺に所蔵されている「秀衡悪尉」の面を詳細に検討する。面裏の印や銘から、この面が出目甫閑の作で元文元年に因州池田家に納入されたものであることを確認し、藩主池田吉泰の能面蒐集について考察している。吉泰は能を溺愛した徳川綱吉が将軍だった時の藩主であるため能には熱心だったが、藩の演能が激減した享保期になってから能面蒐集に励みだした。その理由は芝別邸や鳥取城の焼失により能道具が失われ、岡山藩主や福山藩主などから能面を贈られたことが契機となったと推測する。能への情熱が演能から能面蒐集へと変化した可能性を指摘している。

水谷靖「模倣と創造―能面の「うつし」」（文學藝術35。7月）は能面の写しの特徴を考察する。面打師自身は忠実に写したつもりでも時代の嗜好などによって気付かないうちに変化するのは創造的な写しである、元の面と今との間に存在する時間差を埋めようとするところにある種の個性が宿る、面打家によって写しの決まり事ができたがそれ以外のところで遊びの余地が生じてくるといった指摘がなされているが、観阿弥・世阿弥によって能面の基本形が確定し、それ以降は写しが重視されるようになったという前提から写しを論じるのには疑問が感じられる。（表）

【作品研究】

作品研究では、修羅能についての論考が比較的多かった。原田香織「能楽における『平家物語』の再構築」（『平家物語〈伝統〉の受容と再創造』（おうふう。5月）は『平家物語』そのものの持つ演劇的な視点に留意しつつ、『平家物語』が謡曲に摂取される際に「演じる立場としての空間の再現」が再構築されていく様相を追う。まず、世阿弥は修羅能において①魂魄思想による霊界から現世への出現②敗者による懺悔の物語　③ワキによる「供養」の機能性④修羅道の描写という手法で『平家物語』を再構築しているとし、「死を定点とした視線」によって死とその後の物語形成に独自性を発揮していると述べ、このように滅亡した平家を語ることは、源氏側の正当性を伝え、その支配権を強調することとにもつながると指摘する。『平家物語』を歌舞能として新たな局面を開いた禅竹、親子恩愛の情を中心軸とした『平家物語』の新たな読みを提示した元雅についての言及もある。

原田稿とも共通する問題意識から、三宅晶子「修羅能のシテに選ばれた武将たち―〈清経〉〈敦盛〉そして〈朝長〉―」（『日本文学』60―9。9月）は世阿弥作〈清経〉〈敦盛〉そして元雅作〈朝長〉を取り上げ、世阿弥と元雅がそれぞれ本説から何を読み取り、どのような引用の効果を上げているかを考察している。〈清経〉において世阿弥は、早すぎる入水のお陰で清経

Hosei University Repository

がその後の悲惨な負け戦を経験しなくて済んだとの解釈を示したと指摘し、「さて修羅道に遠近の」を「ところで、もし修羅道に堕ちていたとしたら」と妻への説得を試みた一種の愛情表現とみる。〈敦盛〉は「敦盛最期」の本文を殆ど引用せず、曲舞が戦語りではなく叙情的であること、［キリ］も一般的な修羅能とは違って仇敵に復讐しようとする様子を見せることから、美しく若い貴公子の戦死から死後の救済までを描き、若死にした敦盛への手向けとしたとする。これに対して元雅は、『平治物語』の義朝三兄弟の中でも最も不幸で地味な存在である朝長にスポットライトを当て、その最期の物語を看取った者・看取られた者双方の視点から描き、夢の中での修羅の再現ではなくリアリティーのある修羅能を作り出したと述べる。修羅能の作品研究は「どのテクストに依拠したか」を解明することに重きが置かれてきた感なきにしもあらずだが、本稿はそういったアプローチからはこぼれ落ちてしまう「読み」の問題を「引用」という視点から掬い上げ、個々の作品における「主人公の引用」の位相や曲ごとに施された仕掛けを明らかにしており、世阿弥の言う「平家の物語のままに」（『三道』）とはどのようなことなのかを改めて考えさせられる。なお、〈朝長〉における朝長の造型については伊海孝充「朝長はなぜ腹を切ったのか」（『日本文学誌要』82。2010年7月）にも考察があり、本説との相違に着目して能がいかなる世界を築いているかを読み解くアプローチの有効性がここでも確認できる。

能を中心に扱ったものではないが、「読み」という視点からの論考として、岩城賢太郎「中世・近世芸能が語り伝えた斎藤実盛―謡曲と『源平盛衰記』を経て木曾義仲関連の浄瑠璃作品へ―」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』22。3月）を挙げる。本稿は科研費研究課題「古典演劇が語った「歴史」観についての研究―中世・近世の軍記物演劇―」による研究成果。平家諸本には見えない『源平盛衰記』独自記事、すなわち巻第二十六「木曾謀叛」「兼遠起請」にみえる幼少の義仲を実盛が中原兼遠に託したとする件り、巻第三十「真盛被討」「朱買臣錦袴」「新豊県翁」の義仲が手塚光盛に討たれた実盛を養父と慕って追悼する件りに注目し、実盛の登場する浄瑠璃が、盛衰記の記事に取材しながら世阿弥作〈実盛〉の影響をも受けていることを確認した上で、これが近世における新たな実盛像を形成したと指摘する。さらに、近世文芸作品との関連、及びそれらの版行本等の挿絵に窺える特徴などから、実盛関連話は中世・近世芸能を通して、義仲一代記の一端として展開したと論ずる。

伊海孝充「「ようてう」私注」（『日本文学誌要』84。7月）は〈清経〉［クセ］中の「腰よりやうてう抜き出だし」をめぐる考察。「やうてう」は従来「横笛（おうてき）」が「王敵」に通ずることを忌んだ結果生まれた読み方と説明されることが多かった。古辞書や『平家物語』『義経記』にみえる「ヨウジョウ」の用例を検討し、『教訓抄』等の楽書にこの読みが記載されていないことに着目し、もともとは「平調」の

Hosei University Repository

仮名表記「ひやうてう・ひやうちやう」で本来は「平調に音取る」のように調子をあらわすものが「やうてう」と誤って伝わり、やがて調子ではなく「笛」そのものを指す語として誤解されるようになった可能性を指摘する。

中司由起子「型付における「回ル」―能楽型付の記述ルールの研究(2)」(『能楽研究』35。3月)は、能型付の記述ルールに関する文理融合研究プロジェクトの報告第二弾。「型付の記述を支える『文法』」のわかりにくさを解明すべく、舞台上の動きが多く、シテの人体と曲趣が類型的な修羅能のキリを対象として、「回ル」所作を記述した型付の詳細な分析を行っている。現行の『観世流仕舞形付』において殆どの「回ル」所作の行き着く場所は一つ先の記述まで読まないとわからないことを指摘し、これに対して古型付では「回ル」所作の終点が記述されないケースが殆どで、「回ル」所作には演者の裁量に委ねられる部分が多かったと推測する。評者自身、能の研究を始めて間もない頃、古型付から舞台上の所作を読み解くことの難しさに頭を抱えたことがあるので、そのわかりにくさが何に起因するのかという問題意識から興味深く読んだが、このような型付独特の「記述ルール」をどうすればわかりやすく伝えることができるのかという点については言及がみられず、問題点の指摘のみにとどまっていることが惜しまれる。非常に手間の掛かる作業の積み重ねであるが、初心者や外国人に向けての能の普及を視野に入れると、今後は「文法」の解明を「翻訳」の方法と連繋させた研究が求められるのではないか。

次に、「源氏能」に関する論考を二本。山中玲子「『源氏物語』と女体夢幻能―「源氏能」はどのように成立したのか―」(『平安時代の古注釈と受容』3。5月)は、源氏の女君が自分の生涯を振り返りそれを再現するいわゆる「源氏能」の成立までに、能の側にどのような「器」が必要であったかという視点で、世阿弥時代に成立していたことが確実な〈葵上〉と〈浮舟〉を比較し、女体能の進化を考察した論。本説たる『源氏物語』の浮舟の物語がそもそも、A二人の男性の間で悩んだ挙げ句宇治川に身を投げようとしたという一連の出来事が「浮舟」と「手習」に分かれて語られ、読者には浮舟をめぐり宇治と小野という異なる場所が示されている。B浮舟自身が強く仏による救いを願う。という複式夢幻能的な要素を備えており、これを舞台化しようとすると必然的に、「仏の救済を求める女性の霊が自分の人生のドラマを語る」という女体夢幻能のフレームを選び取ることに繋がる。源氏能が『伊勢物語』を本説とする能のような「物語の秘伝の開陳」ではなく、「女君たちの霊が仏の救いを求めてあの世から現れる」方向へと舵を切るきっかけが〈浮舟〉であったとした上で、本作が〈井筒〉のシテ造型に影響を及ぼした可能性にも言及する。

小林健二「能《源氏供養》制作の背景―石山寺における紫式部信仰」(『国文学研究資料館紀要』37。3月)は成立論。従来《源氏供養》は『源氏供養草子』が典拠とされてきたが、供

Hosei University Repository

養の場が石山寺であること、依頼者の紫式部を石山の観音とするという点で大きな違いを有することも知られている。紫式部伝承と密接に関わる石山寺という「場」に着目し、石山寺における紫式部信仰、「源氏の間」という紫式部を崇拝した空間と画像の存在、そして歌人たちの紫式部を尊崇する文芸行為を通して、石山寺において源氏供養の法会が営まれていた可能性を指摘し、《源氏供養》成立の背景に迫る。

鬼能・風流能に関する論考も目に付いたところである。まず禅竹の鬼能について。樹下好美「作品研究〈鍾馗〉―禅林からの新風―」（『観世』78―4。4月）は「〈鍾馗〉の構想―金春禅竹の鬼の能―」（『藝能史研究』115、平3・1月）の続稿。前稿においては本作を世阿弥からの影響下に成立した作品で、〈鵺〉をはじめとする「哀傷の鬼能」の系譜に連なる祝言性をも持つ新しい鬼能と論じたが、本稿では〈鍾馗〉を世阿弥メソッドの延長上に力動風と砕動風を止揚し結実したものとし、「宝剣」に象徴される「冷へたる曲風」の強細風鬼能の実作と位置づけ、当時の禅林における鍾馗享受についても言及する。周重雷「禅竹作における風流性―龍神物を中心に―」（『日本文学論叢』40。3月）は詞章・演出面から禅竹の龍神物の特色を考察。延年・田楽などの龍神芸が有していた「古来の風流性」を継承しながら、次世代に盛んに作られる風流能への橋渡し的な性格を持つと論ずる。

小田幸子「作品研究〈皇帝〉―治世を守護する鬼神―」（『観世』78―1。1月）は〈咸陽宮〉〈鍾馗〉との関係を検討しつつ、信光作〈皇帝〉の作劇方法を考察したもの。「中国歴史劇」の装いを取りつつ「現実の王権＝将軍家の永続性を間接的に言祝ぐ〈咸陽宮〉の仕掛けがほぼそのまま受け継がれ、シテの御霊神的な造型には〈鍾馗〉の構想とも通ずる点があることを指摘し、禅竹が庶幾した「治世を守る鬼神の能」が〈皇帝〉においてで完成を見たとする。島尾新「鍾馗の変身―〈皇帝〉と〈鍾馗〉の理解のために―」（『観世』78―2。2月）は鍾馗のイメージの「変身」を辿った論考。唐代に来たるべき一年を病魔から守る存在として信仰されていた鍾馗が宋代にはより親しみ深いイメージで受容され、それが室町時代において禅僧を通じて日本国内に広まっていったと述べ、シテの鍾馗に暗さが殆どみられない〈皇帝〉を、ラッキー・シンボル化する鍾馗イメージの先駆けと位置づける。樹下文隆「能〈龍虎〉の背景―禅林の周易受容と神仙趣味」（『文学』12―5。9―10月）は信光作〈龍虎〉の構想の再検討。覇権を求めた英雄たちの戦いを意味する「龍虎の争い」が丹道や風水などの道家的なイメージをも含み込んでいたこと、『周易』を用いて煉金過程を龍虎で説明する『周易参同契』を取り上げ、金丹関係の語とともに周易由来の語が禅語と認識され、「龍吟雲起、虎嘯風生」の如き成句が定着していたこと、五山禅林において広く受容されてきた蘇東坡に丹道の龍虎を詠んだ詩があることを指摘。〈龍虎〉成立の背景に禅林での道教受容があるとした上で、本作を禅竹の〈春日龍神〉のパロディと位置づけ、入唐渡天物語の枠組の中で、丹道由来の龍虎闘諍を見せ場と

Hosei University Repository

しつつそれを無常の表出とし、さらに「龍吟雲起」に託して禅の境地を表出するという、〈龍虎〉の極めて複雑な構造を明らかにした。

『観世』7～12月号は【特別企画】観世文庫創立20周年記念「世阿弥自筆本の能」を収める。松岡心平「言葉のつかい手、世阿弥」（7月）は世阿弥自筆本群の中で捉えることのできる文体（書記スタイル）の使い分け、変化について論じる。自筆能本にみえるカタカナ表記や濁点表記、促音表記などの独創的な工夫は、彼自身が実現しているパフォーマンスや声を文字という媒体を通じて後代に伝えるために生み出されたものであるのに対し、能楽論においては、六十歳近くになって漢字だけで文章を書こうと大胆な文体ないし書記スタイルの変更を試みていると指摘。ここに世阿弥の先鋭化された言語意識をみる。

8、9月は〈布留〉の特集。鎌田東二「『布留』と「心の道」」（8月）は〈布留〉についての考察。冒頭の「次第」にみえる「心の道」は中世人の求める救済を端的に示すものであり、本曲においては水の浄化によって「心」を澄ませ「心の道」を尋ねることが希求されているとする。松岡心平「「布留」の水の女、聖婚と新嘗の記憶」（9月）は〈布留〉の構想を支える①女の布に剣が留まるという布留社をめぐる強力な霊威の世界②初冬の情趣を醸し出す「初深雪」の謡という二つの世界に関する中世神話からのアプローチ。剣に雷神・竜神のイメージを看取し、竜蛇神と巫女との聖婚譚が展開していることを指摘し、〈布留〉の女が「神の嫁」たなばたつめの聖婚が行われた新嘗の記憶を強く残す存在であるため、「初深雪」の謡が不可欠であったと結論付ける。（以上石井）

10月と11月は〈難波梅〉。岩崎雅彦「〈難波梅（難波）〉梅の花と鐘の声」（10月）は、兄弟友愛のエピソードとして著名な「難波津の…」の和歌説話からあえて弟の菟道稚郎子を切り捨て、仁徳天皇（＝足利義持）の賛美に徹した世阿弥の作意を明らかにし、また、「難波梅」の語が世阿弥以前には歌語として用例が多くなくむしろ本曲に世阿弥が用いて広まったこと、天王寺の鐘は「舞楽の音階の基準」という意味を持ち、世阿弥は「王仁の舞楽を導き出す語として、これを用いたと思われる」こと等を示す。鵜澤瑞希「『難波梅』の稚児舞―世阿弥の稚児役者論からの位置づけ―」（11月）は、修士論文の一部に基づくとのこと。世阿弥自筆本『難波梅』に尉と稚児役の子供が登場することに注目し、世阿弥の稚児役者論の中に、『難波梅』の稚児を位置づける。春のはじめに咲く梅花の美と役者の稚児時代の美を重ね、「難波津に」の歌が「歌の父母」であることと二曲の訓練を積んだ稚児が「幽玄の本風」であることを重ねているとの理解、『難波梅』の後場に天女舞ではなく稚児舞を設定したことが『二曲三体人形図』の説明文にも影響を与えているという指摘、本曲のように稚児とシテの舞を見せる作品は「次世代を担う子どもたちの歌舞を披露する舞台として」作られたのではないかとの推定、どれも興味深いが、それだけに一つ一つの論点について

Hosei University Repository

より詳細な論証がほしい。舞の扱いについて〈春栄〉を〈関寺小町〉や『難波梅』と一緒に扱ってよいかどうか疑問も残る。作品、能楽論、演出、さらに史実の整理にもよく目配りがされていて、もっと大きく広げられそうなだけに、『観世』所載の短編で終わらせてしまうのはもったいない。より大がかりな論文として発表されることを期待したい。

続いて12月号にも『松浦之能』関連で二本。天野文雄「《松浦佐用姫》を読む―その「趣向」を中心に」は、作者を世阿弥とは限定しない立場をとり、同曲の場として設定された雪景色、僧が前シテの里女に衣を与える際に唱える「偈」の訂正に関わる問題、鏡の趣向と歌枕との関係等を論じたうえで、本曲は「領巾と鏡という二つの景物を中心に、受衣と誦偈という禅の行儀を加味」し、「佐用姫の執心からの解放」を暗示した作品とする。落合博志「世阿弥自筆本『松浦之能』筆跡小考―袖に涙のさわぐかな―」は、従来公表されている世阿弥自筆能本『松浦之能』の翻刻で「サソウカナ」としている箇所が「サワクカナ」の誤読であることを、世阿弥の筆跡や典拠となる『伊勢物語』の和歌から明らかにしたもの。世阿弥自筆本〈松浦之能〉〈布留〉におけるなぞり書きや上書き訂正は後人ではなく世阿弥によるものであろうとの重要な推定も提示されている。

能楽学会の『能と狂言』（9。4月）にも世阿弥の特集があった。前年8月の世阿弥忌セミナーのテーマが「世阿弥の女能」で、そこでの講演や研究発表が活字化されている。山本登朗「謡曲『井筒』を生み出したもの　講演概要と補記」と河村晴久「〈井筒〉の世界―演者の視点から」は、セミナーでの講演を基としている。山本稿はセミナー当日の質問を機にその後加えた修正も併せ、在原寺（現在の在原神社）の所在地が「櫟本」でも「石上」でも通用する場所であること、在原寺が業平の住居跡だとの説が世阿弥生誕以前にすでによく知られていたこと、平安末期の「歌林苑」に属する歌人たちが櫟本にある人麿の墓所と業平の住居跡を合わせて訪れていること等、在原寺が石上にあるという〈井筒〉の設定の背景に広がる世界を様々な方面から明らかにする。河村稿は標題通り、演者の視点からの作品論。

研究発表の原稿化も二本。天野文雄「《関寺小町》はいつごろ制作されたのか　『音曲口伝』例曲と《関寺小町》の主題と趣向をめぐる試論」は、タイトル通りの内容。『音曲口伝』例曲のうち〈関寺小町〉は応永二十六年当時にはなく世阿弥の後補であるとし、〈関寺小町〉の主題を「舞歌二曲が満足にできなくなった絶望的な嘆きの寓意」と見てその成立時期を世阿弥の最晩年と推定する。また、『申楽談儀』や『五音』が書かれた永享初年頃を最後とし、それ以降の世阿弥の能作活動に目を向けていない現状を指摘、最晩年の能作について考え直すべきと説く。落合博志「〈檜垣〉の構想　つるべと輪廻の喩について」は正式の論文ではなく世阿弥忌セミナーでの詳細な発表の骨子のみを短くまとめたものだが、能〈檜垣〉の構想の根底に輪廻の譬喩として当時広く通用していた「汲水

Hosei University Repository

輪〈汲井輪〉」があるとを指摘し、詞章の要所に「つるべ」が頻出するのも輪廻に捕らわれたシテの表現として意味があることとする。

以上のような特集とは別に、個別の作品研究ももちろん多くあった。小田幸子「小野小町変貌―説話から能へ―」（『日本文学誌要』84。7月）は、〈卒都婆小町〉と〈通小町〉を扱い、前者は中世に流布していた驕慢な小町像や落魄説話に「卒都婆問答」に見えるような「独自の小町像を付加」し、「多層的人間として小町を造型」しており、その結果、「「過去の時間」を内包した老女小町ならではの劇を作り上げることに成功している」と説く。また、〈通小町〉結末部については省略や改訂とは捉えず、「百夜通い」の再現の内に少将の心に生じた持戒の心が機縁となり二人ともに成仏できた、という解釈をとり、小町を成仏させたことにこの曲の新しさを見る。

小林健二「酒呑童子の絵巻と能が作られた時と場」（『伝承文学研究』60。8月）は『酒呑童子』の伝本には謡曲〈大江山〉の影響下にできたと思われるものがあること、香取本『大江山絵詞』は「足利将軍家の武威を示すために構想・制作された」こと、「室町殿の絵巻コレクションの一つであった可能性」もあること等を指摘。能〈大江山〉については「一児二山王」を巡る落合博志氏の説を踏まえつつ、「香取本を披見する機会」のあった「将軍家御用の能役者」が制作したと考えられることを言う。

石井倫子「葛城の神の変容―能〈代主〉の周辺―」（中世文学と隣接諸学5前田雅之編『中世の学芸と古典注釈』9月）は、中世の日本紀や古今集注釈、神道書、縁起、歌論・連歌論等々、まさに能をとりまく「隣接諸学」における言説を丁寧に拾い集め、従来ほとんど顧みられなかった〈代主〉詞章の背景を明らかにしたうえで、「『王城鎮護の神として都に影向した葛城の神・事代主が君臣和合した御代の長久なることを言祝ぐ』という明確なテーマを持つ」ことを論証する力作。また、そうしたテーマが応仁の乱収束直後の観世大夫勧進猿楽（これが初出記録）にふさわしいことを踏まえ、観世小次郎信光が同勧進能のために書き下ろした可能性にも触れる。同「能〈江口〉の象」（『鳥獣虫魚の文学史―日本古典の自然観獣の巻』3月）も情報量が多い。〈江口〉の改作に関する諸説や演出資料を整理しつつ、仏教美術、和歌、物語から幕末の歌舞伎、錦絵まで、日本における象のイメージを博捜する。能〈江口〉については、世阿弥自筆本では曲の末尾「舟は白象となって」で橋懸に出したままの舟の作り物に乗る演技をしたのではないかとの推定をしている。

『銕仙』「研究十二月往来」に載った作品研究は、野口実「『仲光』にみる主従関係」（603。6月）、小田幸子「『六浦』をめぐって」（606。10月）、阿部泰郎「『春日龍神』の背景―貞慶の唱導をめぐりて―」（607。11月）、高桑いづみ「『梅枝』と越天楽今様」（608。12月）の四本。野口稿は〈仲光〉に描かれる近世的な忠義が一般に広まったのは日本が「軍国国家と化した近代に」なってからものであることを指摘する。小

Hosei University Repository

田稿は〈六浦〉の演出古資料を手際よく整理したうえで、同曲の演出における面や装束の重要性を示す。阿部稿は〈春日龍神〉において明恵に下される明神の託宣や現出する奇瑞は、「貞慶の主唱した春日龍神霊山浄土説を基盤」とし、また「貞慶が神に成り替って」説法するという「中世唱導文芸の宗教テクスト生成の運動」を背景とした構想であること説く。高桑稿は、〈梅枝〉の小書「越天楽」復元についての学問的解説。同曲が桃山時代に採り入れていた雅楽の節をどのような資料に基づきどのように復元したかを詳細に示している。

従来の作品研究とは少し変わった手法のものも二篇紹介したい。味方健「能《熊野》の主題と芸態構造―能の作品研究・作者研究・実技研究の綜合体の提唱―」（『楽劇学』18。3月）は、〈熊野〉の詞章と小鼓の手との関係を丁寧に分析し、小鼓が「ヲドル手（乙ノ手・初同の手）・五ツノ手・コス手・入ル手・ノム手（グアイ）」等々の手を打つ箇所には一曲の主題に深く関わる「規模」の言葉が置かれていることを示す。このこと自体、非常に興味深く重要な指摘と思われる。また、世阿弥や禅竹が名作を生み出している時代には詞ができてから曲や囃子の手を施すのではなく「手に辞句を合わせるていの筆法もありえたのではないか」という氏の結論にも耳を傾けるべきと思うが、小鼓の手と辞句との関連という一点を根拠にして、〈姨捨〉も〈西行桜〉も禅竹作かというような論法にはついていけない部分もあり、もう少し丁寧な議論を聞きたいところである。

竹内晶子「世阿弥能にみる日本意識」（『国際日本学』9。9月）は、世阿弥の能作品中で「日本」および「日本ならざるもの」（異国素材）がどのように描かれているかを考察。数多くの詞章例を示しながら、「日本」については人も自然も穏やかで豊かな平和な国とし「猛き国」としては描かないことを明らかにする。また「日本ならざるもの（異国素材）」については特に〈砧〉と〈班女〉の例を用い、「舞台を日本に移し、日本人を主役とする」ほか「日本の文芸ネットワークの中に故事を組み込む」など様々な方法で日本化を図っていることを示したうえで、世阿弥にとって「異国のもの」と「幽玄」は相容れないものであって「平和」の強調と「幽玄」の美意識が「日本」という国の表象、「日本的」であることの意味だったと結論づける。正直に言って、苦しいテーマで書かされたのだろうなという印象はある。世阿弥の特徴として捉えるべきか、能の芸能としての特色か、判断が難しい点もあろう。このように広い視野の中で論じると、能の研究としてはどうしても解説風・総論風になりがちでもある。だがそれでも、能の研究がより広い土俵で論じられるようになるためには、あえて大きな枠組みの中に入れて論ずることも必要だろう。今後、意識して進めていかねばならない方向の一つではないかと思われる。（以上山中）

高橋悠介「能と国土生成神話」（中世文学と隣接諸学3伊藤聡編『中世神話と神祇・神道世界』4月）は、作品と能楽論の両方から、国土生成神話が能に与えた影響を考察する。

Hosei University Repository

『金島書』〈北山〉の描く佐渡生成縁起には、『神祇陰陽鈔』『神祇官私記』等の中世日本紀に記された国土生成神話の影響が読み取れることを指摘する。能楽論については、「一種」の隠喩や「露」の現象が中世の国土生成神話において前面に出てくる一方、密教説話の中で人体の源初としての「赤白二水」（〈北山〉一水・一露）に世界の根源を重ねていく思考が形成されていた」ことと、禅竹能楽論における「一露」「一水」の背景を関連させて述べる。興味深い指摘が多く、すべてを紹介したいところであるが、従来の説をより深化させた考察を一点あげておく。従来、『金島書』という書名の問題に関連して、〈北山〉詞章中の「大日の金文」は『神祇陰陽鈔』等の国名由来説に見える「大日の印文」の誤伝であるとされていた。この説に対し筆者は、大日本国説の異伝中に「大日の印文として金光や独古形の金札を挙げる神話」があり、これらをふまえると〈北山〉中の「金文」は誤伝ではなく「金の印文とする理由があった」ものであろうと指摘する。この考察と、佐渡を金の産地とする『今昔物語集』『宇治拾遺物語』の説話から、佐渡の「鉱山開発前であっても、佐渡の生成譚が金の表徴を組み込んだ大日本国説を引き寄せ、これを組み替えて新たな神話を生み出す素地」はあり、佐渡は「金の島」と呼ばれたのではないかと論じる。

以下に、能の作品に絞ったその他の研究を紹介する。天野文雄「能苑逍遙(50)世阿弥の〈砧〉を読み解く」（『おもて』110）は、室町時代の古写本に見える不可解な点（芦屋某が夕霧に言付けたのは「この年の暮れには帰る」という言葉であったのに、夕霧が妻に伝えたのは「この秋にも帰らない」の言葉であったこと）を、妻の思いを読み解くことで解消した論。妻が夕霧と対面する場面の「契りも絶えはてぬ」は、「夫との契も絶えてしまった」という妻の述懐であり、夕霧が一人で帰国した時に妻は夫の心変わりを確信した設定になっていると読み解く。また砧の段は「夫の帰国を期待している場面ではなく、妻が夫のこの秋の帰国を断念したあとの」慰みであり、砧の段の後の「偽りながら待ちつるに」の詞章は「自分の心を偽りながら」と解釈する。このような解釈を重ね、不可解な点があるとされる前場は「一貫して、在京三年になるこの秋の夫の帰国を断念した芦屋の妻の「思い」が描かれている」のであって、「そこには、矛盾も破綻もない」とする。丁曼「謡曲「班女」の「扇」とその中国語訳の諸問題」（『演劇映像学』２０１０報告集4。3月）は、中国漢詩において男女の恋愛の形見として取り交わすのは扇の一種団扇であり、〈班女〉ではその認識が薄い詞章の解釈となっているのに対し、中国語訳〈班女〉は原点が団扇であることを意識させる訳となっている点など、両者の比較を通じた問題点をあげる。三苫佳子「「初雪鶏」から「初雪」へ―金春禅鳳による改作の可能性」（『名古屋芸能文化』21。12月）は、禅鳳作〈初雪〉は「初雪鶏」の改作であると指摘する。齋藤澄子「能楽「蝉丸」と「弱法師」における〝あわれみ〟と〝悲しみ〟の意識構造―主人公の心理分析にみる日本的情動と達観―（そ

Hosei University Repository

の二）」（『茨城キリスト教大学紀要。Ⅰ、人文科学』45）は、〈蝉丸〉の逆髪と蝉丸の心理的な動きに注目し、「悩みと孤独感を抱える二人の再会と別れのドラマ」と位置づける。

演出関連の論考として、異分野との共同研究も含めた三篇をあげる。村上湛「能〈恋重荷〉の再構成・再演出について」（『明星大学研究紀要（人文学部・日本文化学科）』19。3月）は単なる復曲ではなく、繰り返し上演されることを想定して、筆者が再構成した〈恋重荷〉の詞章と演出を公開したもの。異分野との共同研究の成果は次の通りである。岩月正見・山中玲子・大塚将太・中司由起子・柳瀬千穂「能の型付資料に基づく所作単元の分析と舞の3Dアニメーション合成」（『情報処理学会研究報告。人文科学とコンピュータ研究会報告』2011―CH―91（7）。7月）は、能の型（所作単元）をモーションキャプチャで収録し、そのデータから一連の舞に組み込まれても必ず演じられるコア動作部分を抜き出す方法と、コア動作部分を型付の記述に従って、CGアニメーションツールを用いて時系列的に配置することによって、仕舞を3Dアニメーションとして合成する方法について解説する。能の舞の特色について、理系の知見やデータの分析から判明した、能の舞が常に舞台正面を意識して演じられる点、所作単元の開始姿勢が舞全体の方向感を決定する点など、新しい視点による指摘がされている。芝公仁・曽我麻佐子・ジョナサルズ「インタラクティブ技術を活用した創作能演劇パフォーマンス」（『情報処理学会研究報告。EC、エンタテインメントコンピューティング』2011―EC―19（18）。3月）は、CG映像とコンピュータの相互作用技術を演出に取り入れた創作能演劇「蜘蛛の糸」の制作と公開について、CG映像の作成と制御をおこない、それを投影するシステムを構築したことを報告する。システムには舞台上の役者の演技や観客の動きを取得できるカメラ・加速度センサも含まれ、投影する映像をリアルタイムに変化させる演出を用いたことが説明される。劇中の〈善知鳥〉をアレンジした場面では、猟師を演じる能楽師の動作に合わせて、CGキャラクタで作成制御された地獄の鳥がスクリーンに投影される。初心者のための能鑑賞の催しや学校教育における能楽の学習に応用できる可能性のあるシステムではないだろうか。他分野（特に理系の研究）との共同研究は、今後増加していくと思われ、特に演出研究においては、共同研究の試みは新しい論の構築をうながすだけでなく、すでに固定概念化していた事項を広い視野で客観的に再考するきっかけを与えてくれよう。

最後に、異分野の視点で能を研究対象にした論考を紹介する。宮本明子「鏡の中の紀子―『晩春』における「杜若　戀之舞」―」（『演劇映像学』2010報告集1。3月）は、〈杜若〉のシテの人物造形が多面性であるという能の構想が、映画の主人公紀子の設定や登場人物の関係に反映していることを指摘する。映画の観能場面では序ノ舞の小書相当場面を採用していないのにもかかわらず、あえてクレジットに「恋ノ舞」の小書付で表示する理由を問題点にあげる。その理由に

Hosei University Repository

ついて、杜若の精が橋掛リで水鏡の型をして自らと業平の影を重ね合わせて見る小書中の演技を、映画結末において女主人公紀子が花嫁姿で鏡に映る場面や、父が鏡の中の娘に答える場面に反映させたからと考察する。能楽研究が他分野の研究と成果を共有できる可能性を示した論である。平辰彦「古典主義的演劇とバロック的演劇における幽霊の比較研究」(『尚美学園大学総合政策研究紀要』21。12月)。は、古今東西の演劇における幽霊を、「三単一」の法則が守られた劇作法による「古典主義的演劇」の幽霊と法則を無視した自由奔放な劇作法により「バロック的演劇」の幽霊に大別し比較するもの。能の幽霊はギリシア悲劇と同じく「古典主義的」、歌舞伎の幽霊はシェイクスピア劇と同じく「バロック的」とする。(以上中司)

【狂言研究】

まず、資料紹介・資料研究から。米田真理・雲形本研究会「豊橋市安海熊野神社蔵狂言伝書の性格」(『名古屋芸能文化』21。12月)は江戸後期から大正期にわたる長い時間をかけて編まれた熊野神社の狂言伝書(台本)群の基礎調査の報告。資料に見える人物名の調査と、台本の系統調査を通して、江戸時代は山脇和泉系が大半を占めるが、明治時代以降、早川幸八系などの影響を受けながら受け継がれてきたことを指摘する。恵阪悟「『遠集間』の紹介と考察」(『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』4。3月)は神戸女子大学古典芸能研究センター伊藤正義文庫蔵の番外曲・稀曲の間狂言台本の紹介と分析。本資料が大蔵流のもので、宗家蔵「大蔵虎明間之一本」と関係が深いが貞享松井本とは別系統であること、「太子」「橘」が秀吉七回忌にあたる豊国神社臨時祭の初演時の台本であることなどを考察し、「嵐山」と題されるものは伝本が報告されていない「吉野詣」の間狂言であると推測する。両稿とも、さらなる詳しい調査や翻刻が予定されているので続稿を俟ちたい。内山弘「『和泉家狂言目録』と和泉流三派の関係について」(『国語国文薩摩路』55。3月)は同誌前号に翻刻された文政七年奥書の『和泉家狂言目録』の考察。掲載曲目を名寄・台本所収曲と比較し、大方山脇和泉派の名寄であると認められるが、三宅派の番外曲と語リが含まれるなど位置づけが難しい曲も含まれることを指摘する。また絵画資料に関しては、『秘蔵日本美術大観』(講談社、一九九二～九年)所収の海外美術館・博物館蔵の絵画から能・狂言関係の図絵を調査した藤岡道子「狂言の絵画資料の収集　その四―大型美術本所収　在外狂言絵の探索―」(『東洋哲学研究所紀要』27。12月)がある。

次に作品研究にかかわる論。網本尚子「狂言に描かれた花―「真奪」の考察を中心として」(『富士論叢』56―1。11月)は「真奪」の作品論というよりは、狂言と立花(たてばな・りっか)の関係についての考察。「真奪」については「太刀奪」などの影響下に成立したことを論じ、狂言と立花の関係については花道史などを参照しながら、立花が狂言作者周

Hosei University Repository

辺では馴染み深い遊びではなかったため、これを描く狂言が少なかったと推測する。「真奪」の成立には中世の立花の流行が影響していると推測しているが、狂言と立花の関係をめぐる考察と齟齬するのではないだろうか。石川泰莱「百姓狂言におけるめでたさ―狂言「餅酒」を通して―」（『神女大国文』22。3月）は「餅酒」をもとに百姓狂言における百姓と領主の関係を考える論。従来の研究では、百姓狂言の祝言性は支配階級への隷属的なよろこび、年貢を納めたことにより武士からの支配を防ぐことができたよろこび、という二つの見解が出されている。それに対して、石川稿は餅を納めるという公事に対して、領主が酒を振る舞うという両者の関係に注目し、共に共同体を築こうと姿勢を確認できたというめでたさであると考える。この解釈が百姓狂言全般にいえるか明言されていないが、もしそうであれば「昆布柿」「筑紫奥」など盃を与える場面がない曲はどう考えるべきだろうか。原田香織「狂言における連歌の機構」（『東洋学研究』48。3月）は狂言に取り込まれた連歌の効果についての考察。連歌が庶民からも篤い信仰をあつめていた天神と七福神と密接な繋がりがあり、連歌の言葉が神徳につながると位置づける。さらに「簑被」「連歌盗人」などを例に、狂言における連歌という虚構空間では、連歌に邁進する者がその功徳によって幸福を得るという構造があると読む。和歌と対比させた考察は説得力のあるものだった。

作品研究とは少しずれるが、林和利「シェイクスピア翻案喜劇に見る狂言の可能性」（『名古屋女子大学紀要　家政・自然編　人文・社会編』57。3月）はシェイクスピア喜劇と狂言の比較論。シェイクスピア翻案劇「法螺侍」と「まちがいの狂言」をそれぞれ「ウィンザーの陽気な女房たち」と「間違いの喜劇」と比較し、狂言様式によるシェイクスピア劇の「スリム化」の可能性を指摘する。またルース（道化）と太郎冠者などを比較し、両者の類似点と相違点を挙げる。

演出的な内容の論が一本ある。戸田健太郎「狂言における「地謡」の変遷（その一）―初期台本の〝同（音）〟をめぐって―」（『フィロカリア』28。3月）は、狂言台本の「同」「同音」の表記とその演出をめぐる考察。大蔵流は虎明本の考察と虎寛本との比較、和泉流は天理本の考察と南大路家本との比較から、江戸時代初期の台本の「同音」には立ち役の同吟、地謡、その両方の可能性があるものが含まれ、謡う役は必ずしも現在の演出と一致しないことなどを指摘する。新視点の研究ではあるが、考察には納得できない点もある。特に大蔵流の考察は現在の演出に当てはめながら行われていることに違和感を覚える。また同音に右の三つの意味があることを指摘するだけでなく、その三つについて何らかの差異（「このように表記されていれば同吟」など）を見いだすことが重要ではないだろうか。続稿があるようなので、研究の進展を期待したい。

近年多い狂言台本を言語学・国語学の資料とする研究は二本。ともに虎明本を用いた研究である。李忠均「『天草版平

Hosei University Repository

家物語』と『大蔵虎明本狂言集』における「シテゴザル」形式の意味」（『日本語学論集』7。3月）は『天草版平家物語』と虎明本の「シテゴザル」のアスペクト的意味を比較し、中世から近世にかけての用法の変化を探る研究で、虎明本は進行（～ている）と結果存続（～た、～ている）の意味が飛躍的に増えていると指摘している。近藤明・邢叶青「「迷惑」の意味変化―虎明本狂言から四迷・漱石まで―」（『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』3。2月）は「迷惑」の意味を、Ⅰ要因が加害者にある、Ⅱ加害者の非意図性、Ⅲ被害の程度、Ⅳ加害・被害の不当性の四つに規定し、中世～近代の意味変化をたどる研究。虎明本の用法は、現代語の「困る」くらいの意味（「武悪」の「めいわくなさるる」）、意図的の加害行為（「老武者」の「めいわくさせう」）などの用法が中心で、現代語と大差があることが論じられている。

狂言を用いた表現教育の現場からの報告として、井本トシミ・岡田桂子・嶋田由美「ことば遊びから狂言「蝸牛」へ―語ることから拡がる保育の総合的な表現活動」（『和歌山大学教育学部紀要　人文科学』61。2月）と吉瀬千代・嶋田由美「表現・創作活動を通して学ぶ狂言―小学校における「くさびら」の指導実践の考察―」（『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』21。9月）の二本がある。前者は反復練習が日常の狂言遊びに広がっていく過程を、後者は成果発表会までの学習過程を報告している。古典芸能の観客の裾野を広げるという意味では、大変有意義な活動であるし、教師たちの工夫にも敬意を表したい。ただし、プロが関わることなく教師が本などで学習したことを伝える実技講習には、本当の狂言の魅力を伝えるという点で限界があると思う。

最後に『藝能史研究』（195。10月）にまとめられている「流動期の狂言―中世と近世をつなぐもの」と題された第四十八回藝能史研究会大會の報告を紹介する。「流動期」とは小山弘志が定義した、天正狂言本以前の時代区分である。関屋俊彦「基調報告「流動期の狂言をめぐる諸問題」は、流動期における種々の問題点を指摘する。大蔵流については、虎明の呼称について、長命猿楽と大蔵家との関係、大久保長安と大蔵家との関係、大蔵弥右衛門家文書についての先行研究の整理が中心。和泉については、南都禰宜衆であった奈良六条の猿楽集団の考察から、和泉流の成立過程を素描する。鷺流については、出雲お国の庇護者が大久保長安で、舞台に一緒にあがっていた狂言師が鷺流の役者であったかと推測する。個々に興味深い問題だが、統一的な視点があったほうが、基調講演として理解しやすかったのではないだろうか。稲田秀雄「鷺流の「古態」―天正狂言本との関連を中心に―」は、天正狂言本との比較から、鷺流台本に残る古態を導き出す研究。結果、古態は仁右衛門派にもっとも多く残存しており、その内実は芸の洗練の過程で排除された卑俗な荒々しい演出であったことを指摘する。特に特殊な記述を残す寛政有江本の存在が気になった。藤岡道子「狂言の古図から見えてくるもの―江戸時代以前の演技・演出を推考する―」は絵画資料

Hosei University Repository

の比較を通して、近世初期の狂言の姿を探る論。「いぐい」はいぐいを探す人物が若い男で、いぐいも子どもではなかったとし、曲自体の解釈への影響を示唆する。種々の曲の絵画から、近世初まで大名と年貢上納物のお百姓は剣先烏帽子を付けていたと推測する。「いぐい」については、国立能楽堂蔵「古能楽図」では男が若衆であることがわかるが、他図の男は掲載図版を見る限り、なかなか判断が難しいと感じられた。長田あかね「年預と《翁》―長命茂兵衛の活動を中心に―」は上狛の安田家蔵「長命茂兵衛家文書」を用いた年預の活動実態に関する研究。両神事能における役割・収入・出演状況の分析と金春大夫との関係を通して、金春座の年預として活動していた長命茂兵衛が徐々に衰退していった課過程をたどる。従来の説の補強的内容で、肝心な「流動期」の活動の分析は江戸時代の活動からの類推となっており、大きな研究の進展が見られなかったことがもの足りなかった。長命茂兵衛家文書は「流動期」というテーマに縛られず研究した方が、より成果が期待できると思われる。（伊海）

【外国語による能研究】

◎論文

Amano, Yuka. “ “Flower” as Performing Body in Nō Theatre.” *Asian Theatre Journal*, 28: 2 (fall 2011), pp. 529-548.（アマノユカ「能楽における演ずる身体としての「花」」）

世阿弥の伝書における「花」概念と市川浩の「錯綜体」概念、および〈忠度〉後場の検討を通じ、一つのキャラクターの肉体というにとどまらない、能における包括的な身体のあり方を検討するもの。ただし近年の研究書・論文がほぼ全く参照されていないためもあり、各論が上滑りしがちである。

Campbell, Peter A. “Teaching Japanese Noh Drama through Visualizing Space.” *Theatre Topics* 21:1 (2011), pp.1-10.（ピーター・A・キャンベル「空間の可視化を通じた日本の能教授」）

能の専門家でない教員（著者はギリシャ古代劇の専門家）がアメリカの学部生向け「演劇入門」クラスで能をいかに効果的に教授するか――本稿はこの問に対する一つの回答として、教室での著者の実践を具体的に紹介する。演劇の理解には身体を通じた実践が重要であることを力説し（著者の学生達は能役者のワークショップに参加した後、教室内で能を「上演」する）、能が学生の演劇一般の理解をも深める極めて豊かな教材であることを説く。

Boucquey, Thierry. “Nipponese Cousins of Medieval French Farce Characters: A Primer on Ancient Japanese Kyogen.” *Pacific Coast Philology*, 46 (2011), pp. 1-12.（ティエリー・ブクェイ「中世フランス喜劇の日本の親戚：日本の狂言入門」）

本稿は論文ではなく、前年の Pacific Ancient and Modern Language Association（PAMLA）第一〇八回年次総会におけ

Hosei University Repository

る会長挨拶であるが、中世フランス喜劇と狂言の比較を扱うものである為ここに所収した。著者は中世・近代フランス演劇の研究者。狂言と中世フランス喜劇の類似性に注目し、両者を生み出したそれぞれの社会の構造との関係を探るという研究の第一段階として、本稿ではまず、狂言の分析結果(一件につき九十六のフィールドをもつデータベースに、百曲の狂言を記録して得た統計結果)を紹介している。後に中世フランス喜劇についても同様の作業を行って比較分析を行っていく予定らしいが、本稿で紹介される狂言の統計結果自体――作品内のキャラクター同士の力関係において、上位に来るのは女性、犯罪者のターゲット、家来であり、最も下位にあるのが盲人――は、そう目新しいものではない。

Tezuka, Miwako. "Experimentation and Tradition: The Avant-*Garde Play Pierrot* Lunaire by Jikken Kōbō and Takechi Tetsuji." *Art Journal* 70:3 (fall 2011), pp. 64-85. (手塚美和子「実験と伝統：実験工房と武智鉄二による前衛劇『月に憑かれたピエロ』」)

武智鉄二演出で実験工房が一九五五年に上演したシェーンベルク作曲「月に憑かれたピエロ」(当時の公演タイトルは「円形劇場形式による音楽劇の夕べ」)において、能・狂言の要素がいかに新しい演劇形態の創出に生かされているかを豊富な図版とともに紹介する。本公演においては観世寿夫がアルルカンを、野村万作がピエロを演じており、武智鉄二の演出は朗誦や所作や仮面などに能の要素を積極的に取り入れたものだった。当時の日本の演劇界において、こうした新たな古典演劇の応用が持ちえた意義を説く。

Foley, Kathy. "Shakespeare-Asian Theatre Fusions: Globe-"alization" of Naked Masks (Bangkok), Shadowlight (San Francisco), and Setagaya Public Theatre (Tokyo)." *Asian Theatre Journal* 28:1 (spring 2011), pp.7-43. (キャシー・フォーリー「シェイクスピアとアジア演劇の混交：ネイキッドマスク(バンコク)、シャドウライト(サンフランシスコ)、世田谷パブリックシアター(東京)の国際化／グローブ座化」)

アジアの伝統演劇手法を応用したシェイクスピア上演の試みを紹介する本稿では、世田谷パブリックシアターでの野村萬斎による三つの作品、「間違いの狂言」(二〇〇一年)「ハムレット」(二〇〇三年)、「国盗人」(二〇〇七年)を詳述する。

Jew, Kimberly May, Canyon Sam, Denise Uyehara, and Brenda Wong Aoki. "Perspectives on Asian American Performance Art: Contexts, Memories, and the Making of Meaning on Stage. An Interview with Canyon Sam, Denise Uyehara, and Brenda Wong Aoki." *MELUS* 36:4 (Winter 2011), pp. 141-158. (キンバリー・メイ・ジュー、キャニオン・サム、デニーズ・ウエハラ、ブレンダ・ウォン・アオキ「アジア系

Hosei University Repository

アメリカ人のパフォーマンスアートについて：コンテキスト、記憶、舞台上での意味創出　キャニオン・サム、デニーズ・ウエハラ、ブレンダ・ウォン・アオキのインタビュー」）

三人のアジア系アメリカ人女性パフォーマンスアーティストへのインタビュー記事である。そのうちの一人、ブレンダ・ウォン・アオキ（一九五三～）は名前からもわかる通り日系でもあり、能や狂言を含め東西様々な文化の演劇、音楽、舞踊をそのパフォーマンスの中に組み込んでいる（彼女自身は野村万作のもとで狂言を学んでいる）。自身のパフォーマンスに対する日本の観客の反応とアメリカの観客の反応の差を語る言葉が興味深い。

なお本年度の *Asian Theatre Journal* 秋号は、前年の Association for Asian Performance（AAP）年次総会で開催された、アメリカにおけるアジア演劇研究第一世代に関するシンポジウムで発表された論文を特集している。所収された論文のうち以下の二本は、アメリカにおける日本古典演劇研究の創成期において重要な役割を果たした二名、すなわちアンドリュー・T・ツバキとアール・R・アーンストの功績を紹介するものである。

・Swain, John D. "Andrew T. Tsubaki." *Asian Theatre Journal*, 28:2 (fall 2011), pp. 368-374.（ジョン・D・スウェイン「アンドリュー・T・ツバキ」）

一九五〇年代末に日本からアメリカに渡ったツバキ（一九三一～二〇〇一）は、以来長きにわたって、主にカンザス大学を拠点としてアメリカ人学生への能・狂言の普及活動に尽力した。野村又五郎に狂言を、野村四郎に能を学んだ彼は、能、狂言の伝統的な演劇手法を学生に指導するのみならず、それらを応用して新たな劇を創作し（あるいは学生たちに創作させ）、学生に上演させた。能の実践と創作を通じた彼の演劇教授法は、現代の日本の大学教育の現場にも十分有効であろう。

・Brandon, James R. "Earle S. Ernst." *Asian Theatre Journal*, 28:2 (fall 2011), pp. 332-340.（ジェイムズ・R・ブランドン「アール・S・アーンスト」）

ＧＨＱの検閲部の演劇部門責任者として歌舞伎に出会ったアーンスト（一九一一～一九九四）はその後、アメリカの大学で初のアジア演劇コースを、さらには初の博士課程を、ハワイ大学において立ち上げた。そこで教鞭をとる傍ら、学生に歌舞伎を上演させ、また能を含めた日本古典演劇の翻訳、概説書を出版するなど、アメリカにおけるアジア演劇研究の創設・推進に多大な貢献を残した。

【単行本】

Regelsberger, Andreas, and Stanca Scholz-Cionca ed. *Japanese Theatre Transcultural: German and Italian Interwinings*. Munchen: Ludicium, 2011. iii＋230 pp.（アンドレアス・レーゲルスベルガー、スタンカ・ショルツ＝チョンカ編『多文化

Hosei University Repository

の日本演劇：ドイツ、イタリアとの相関関係』）

本書は、二〇〇九年にトリアーで開催されたシンポジウムの成果に基づく論文集である。日独伊の研究者から寄稿された十四編の論文中、約三分の一にあたる以下の五編が能を取り上げている。

・Pellecchia, Diego. "The International Noh Institute of Milan: Transmission of Ethics and Ethics of Transmission in a Transnational Context." pp.32-50.（ディエゴ・ペレッキア「ミラノの国際能楽研究会：異文化間での倫理の伝達と伝達の倫理）

能楽の従来の稽古作法を変えることなく、多くの外国人弟子を育ててきた宇高通成の国際能楽研究会（ＩＮＩ）の国内外の活動を紹介する。また、その（外国人に誤解を招きがちな）伝統的稽古作法のもつ多層的な意義を、文化人類学のＬＰＰ（正統的周辺参加）という概念を援用して説明する。

・Schmitt, Pia. "Early German Encounters with Japanese Performing Arts—On Hermann Bohner's Examination of Nō." pp.95-111.（ピア・シュミット「日本演劇とドイツの初期の出会い——ヘルマン・ボーナーの能研究」）

一九二二年の来日以来六三年に神戸で亡くなるまで、ドイツに向けての日本文学の翻訳・紹介を精力的に行ったヘルマン・ボーナー（一八八四～一九六三）の能研究を取り上げる。能の「神秘的な」側面や「日本精神の体現」としての側面、ギリシャ悲劇との類似への注目など、彼の能受容に当時のドイツの、また日本の能楽観が大きく影響していることを指摘する。

・Galliano, Luciana. "Japan and Contemporary Opera (in Italy)." pp.157-167.（ルチアーナ・ガッリアーノ「日本と（イタリアにおける）現代オペラ」）

能に想を得た、シュトックハウゼン、クセナキス、ハンス・ヴェルナー・ヘンツェらの現代オペラを紹介するが、中でも頁を割かれるのが、〈綾鼓〉に基づくオラツィオ・フィウメ（Orazio Fiume 一九〇八～一九七六）作曲のオペラ *Il tamburo di panno* である。日独伊三国同盟の頃にさかのぼる〈綾鼓〉イタリア語翻訳の事情、さらにオペラ化に伴う台本改変など、制作の背景が詳細に説かれている。他に、能を模したエズラ・パウンドの試作品 *Tristan* に基づく、Pennisi 作曲のオペラも紹介されている。

・Sartori, Donato. "Masks: East and West Confronted." pp.168-172.（ドナート・サルトリ「仮面：対決する東と西」）

著者とその父が主宰してきたコンメディア・デッラルテの仮面工房の歴史および観世栄夫、野村耕介らの能楽師との交流を概観する。

・Centonze, Katja. "Topoi of Performativity: Italian Bodies in Japanese Spaces/Japanese Bodies in Italian Spaces." pp.211-230.（カティア・チェントンツェ「パフォーマティヴィティの場所：日本の中でのイタリアの身体／イタリアの中での日本の身体」）

Hosei University Repository

パフォーマンスの場を異文化に置いたときに、パフォーマ―の身体がどう従来と異なる「場」を克服してゆくのかを論じる。取り上げられた三例のうちの一例が、イタリア人パフォーマンスアーティストであるアレッシオ・シルヴェストリンと津村禮次郎による能楽堂での、あるいはイタリアでの様々な共同パフォーマンスである。

Tschudin, Jean-Jacques. *Histoire du théâtre classique japonais.* Toulouse: Anacharsis, 2011. 506 pp.(ジャン＝ジャック・チュディン『日本古典演劇史』)

フランス語。能、人形浄瑠璃、歌舞伎を中心とした日本古典演劇史である。第三部(pp.159-241)が能・狂言の発生と展開に当てられ、さらに第六部で明治維新以降のこれら古典演劇の変革がまとめられている。巻末には詳細な日本古典演劇用語集、索引、文献リストが設けられている。能楽関連の文献リストに関して言えば、日本語文献は基本的なライン(岩波講座等)がおさえられているだけであるが、欧米言語の研究書はかなり最近のものまで網羅的にリストアップされている。フランス語圏のたとえば学部の学生等が、研究を深めていく最初の手がかりを与えてくれる書となるのではないだろうか。(竹内)